

江木欣々女史

長谷川時雨

青空文庫

大正五年の三月二日、あたしはかんだあわじちちよう神田淡路町のえぎけ江木家の古風な黒い門をくぐっていた。

旧幕の、ぶげやしき武家邸の門を、そのままであろうと思われる黒い門は、それより二十年も前からわたしは見馴れているのだった。わたしは日本橋区とおりあぶらちちようの通油町というところからおがわまち神田小川町のちくはくえん竹柏園へけいこ稽古に通うのに、この静な通りを歩いて、この黒い門を見て過ぎた。その時分から古い門だと思っていたが、そのころから、すまい江木氏の住居かどうかは知らなかった。

「この古い門のなかに、きんきん欣欣々女史がいるのですかねえ。」

つれだ連立った友達は、度の強い近眼鏡を伏せて、独りえ笑みをしていた。

「れいかい冷灰博士——そっちの方のお名には、そぐわないことはないけれど」

友達が言うとおりであった『あるじ冷灰漫筆』の筆は、風流にことよせて、サツと斬りおろす、この家の主人のあるじ該博な、鋭い斬れ味を示すものだった。だが、今を時めく、ざいや在野の法律大家、官途を辞してから、弁護士会長であり法学院創立者であり、江木刑法と称されるほど

の権威者、盛大な江木衷氏の住居の門で、美貌と才氣と、芸能と、社交とで東京を背負つてゐる感のある、栄子夫人を連想しにくい古風さだった。しかしまたそれだけ薄っぺらさもなかつた。含みのある空気を吸う気もちであつた。

たそがれ時だったが、門内にはいるとすつかり暗くなつた。

梅が薫つてくる。もう、玄関だった。

広い式台は磨かれた板の間で、一段踏んでその上に板戸が押開かれてあり、その畳に黒塗りぶちの大きな衝立がたつてゐる。その後は三間ばかりの総襖で、白い、藍紺の、ふとく荒い大形の鞞形——芝居で見る河内山ゆすりの場の雲州松江侯お玄関さきより広大だ、襖が左右へひらくと、黒塗金紋蒔絵のぬり駕籠でも担ぎだされそうだった。

「これはどうも——平民は土下座しない」と——

と、平日は口重な、横浜生れではあるが、お母さんは山谷の八百善の娘であるところの、箏の名手である友達は、小さな体に目立たない渋いつくりでつましく、クツクツと笑つた。気持ちの好い素足に、小倉の袴をはいた、と五分苧りの少年書生が横手の襖の影から飛出して来て広い式台に駈けおりて、

「どうぞ。」

と、招いた客の人相をよく言いきかされて、呑^{のみこ}込んでいるように笑顔で先導する。

次の間には、女の顔が沢山出むかえた。

「さあ、こちらへ、さあこちらへ。」

招じられた客間は、ふかふかした絨^{じゅうたん}毯、大きな暖^{ストーブ}炉に、火が赤々としていた。

春には寒い——日本の弥生宵節句^{やよいよいせつく}には、すこしドツシリした調子の一^{いっぶく}幅の北歐風の

名画があつたともいえようし、立派な芝居の一場面が展開されるところともいえもしよう
形容を、と見るその室内は有^もつていた。

欣々夫人の座^ざ臥^が居住の派手さを、婦人雑誌の口絵で新聞で、三日にあかず見^み聞^きしている
わたしたちでも、やや、その仰^{おほ}々しい姿^{ポーズ}態^{たい}に足^{とど}を止^{とど}めた。

客^{へや}間の装飾は、日本、支那、西洋と、とりあつめて、しかも破^は綻^{たん}のない、好みであつた、
室^{すみ}の隅^{すみ}には、時代の好^よい紫檀^{したん}の四尺もあるうかと思^{おも}われる高^{たか}脚^{あし}の卓^{だい}に、木^も蓮^{くれん}、木^も瓜^{ぼけ}、
椿^{つばき}、福寿草^{ふくじゆ}などの唐^{から}めいた盛^{もり}花^{ばな}が、枝も豊かに飾^かられてあつた。大きなテ^てーブルなどは
おかないで、欣々女史はス^すト^とー^とブに近^{ちか}くなかば入口の方へと身^みをひらいて、腕^{うで}凭^かけ^{けい}椅子^{いす}のゆ
つたりしたのにゆつたりと凭^よりかかつていた。

彼女は、驚嘆したであろう客の、四つぶの眼の玉を充分に引きよせておいて、やおら身じろぎをした。立上って、挨拶をしようとするのだ。

それまでに、わたしたちは、充分に見た。長く曳いた引き裾の、二枚重ねの褌は、柔らかい緑色のスリッパ履の爪さきにすつとなびいている、紫の被衣のともいろの紐は、小高い胸の上に結ばれて、ゆるやかに長く結びさげられている。

胸の張りかた、褌の開きかた、それは日本服であって立派な夜会服のかたちだ。肩から流れる袖のひだなど、実になめらかに美しい。そして、胸のふくらみから腰から脚へかけての線など、その豊饒な肉体の弾力のある充実を、めざましく、ものの美事に示している。

切子の壺のような女性だ、いろんな面を見せてふくぎつにキラキラしている。

気の弱い男だったらあがってしまいうだろうな。と、その個性の高い香気を讚美しながら、ひきつける魅力の本尊は何処かと、彼女の眼を見た。

彼女の双眼は、叡智のなかに、いたずら気を隠して、慧しげにまたたいていた。引き緊った白い顔に、黒すぎるほどの眼だった。もとより黒く墨を入れているのでもなければ睫毛に油をうけているのでもなく、深い大きな眼に、長すぎるほどな睫毛が濃かった。眉が

また、長くはつきりとしていて、表情に富んでいる。

——晴れ曇る、雨夜の、深い暗の底にまたたく星影——そんなふうには、彼女の眼はなんにも、口でいわないうちに何か語りかけている。

彼女が立ったとき、椅子のふちにかけた手は、妖しく光った。指輪にしてはあまりにきらめかしいと見ると、名も知らないような宝石が両の手の指にも煌めいているのだ、袖口がゆれると腕輪の宝石が目を射る、胸もとからは動くところからとちらちらと金の鎖がゆれて見える。

彼女の毛は、解いたならば、昔の物語に書いてある、御簾の外へもこぼれるほど長いに違いないほどたつぷりと濃いのを、前髪を大きく束髪も豊かに巻いてある。

「こうして、ちゃんとしてお目にかかるのははじめてだけれど、あなたはあたくしのことはよく御存じだから——たつたひとつあなたには聴いておいて頂きたいことがあるのよ。」
 彼女はあたしの友達の、箏の名人の浜子を見てつけたした。

「折角お招き申してもおさびしいといけないと思って、一番仲のよいお友達と御一緒にと申しあげましたの。」

一風も二風もある浜子は、その光栄を、軽く頭をさげておいて先刻のふくみ笑いをまだ

つづけている。

合あいきやく客は、ある画伯の夫人と、婦人雑誌で名の知れた婦人記者磯いそむら村女史だった。その人が、欣々さんからの使者にたつて、出ぎらいだったわたしを引出したのだった。

「美人伝は、こちらがお書きになつてらつしやるから、いけないけれど——」

と、画伯夫人は、列伝体のものを、欣々女史の名で集めて残したらよかろうということをしきりに勧めた。

「そういえば——」

と、それが言いたい、今夜の招待まねきだとも知れぬように知れるように彼女は言いだした。

「あたしのように、血縁のものに縁の薄いものがありましようか、あたくしの母は、十六歳であたくしを生んだといいますが、物ものごころ心づいてからは、他人に育てられましたのよ、だから、生の母にも逢わずに死なせ、その実母ひとの父親——おじいさんですわねえ、その人は、あたしが見たい、一目逢いたいと、それだけが願望だったというのにこれも隔きようだいてがつて逢わずに死なせてしまいましたわ。実父の家とは、父の死後に、義母姉きようだい妹の交わりをするようになりましたけれど——」

その、哀れなはなしは、わたしの小さな美人伝に書いたことなのでみんな知ってはいた

が、いたましい思いに眼を伏せていた。

悲しい事実も、さかり盛時の彼女には悲話は深刻なだけ、より彼女が特異の境遇におかれるので、彼女は以前からもと隠そうとはしなかった。ただしんぼうのならないのは、子供があると
いわれることだと彼女はいった。

「私に、子供があつてくれればですが、でも、ないものをあるといわれるのは、いや嫌なもの
ねえ。ある時、あなたの子だと、名乗っているものがある、それが誠に美しい容貌ようぼうの男
の子なので、誰しもそれを疑わずにその者のいう通り、あなたの隠し児ごであるのかと信じ
ている。という、便りをきかせてくれたものがあつたのです、ええ拵こしえものでも、
でも、驚きました。」

さまざまな手配をして、ようやくぶんみょう分明にしたのだといって、

「美しい人に似ているといわれた心地こころちよさから、つい名を騙かたったというのです。その子
供も、別段わるい心ではなかつたが、ふと欣々の子だといったら案外大切にされたので、
一度口にした効果がわすれられなかつたからだと言う訳なの。」

けれど、厭いやな思いもしたし、かなり迷惑もした。人をもって警察の力も借りて、のちのち後々
そういうことのないようにしてもらいはしたが――

「ほんとの子ならばしかたがないが誤伝で、いやなものねえ。」

白い袖の振りを、指輪の手でしごきながら話していたが、突然いきなり白い襦袢じゆばんの袖をひっぱりだして、急いで眼にもつていった。その瞬間、たもちかねたような、大つぶの雫しずくがこぼれるのを見た。

まあと、深く息をのんで、感動を現わし示したのは合客たちだった。浜子は黙して眼鏡めがねをずりあげていた。わたしも気の毒さに面おもを伏せているよりほかなかった。

その間に、電話の鈴ベルがひびいて取次がれた、彼女は輝く手でまぶたをおさえながら、「あ、大臣の、尾崎さんの夫人おくさまからなら、どうか明みょう日にち御覧ごらんにお出下いさいまして。」

眼は濡ぬれていて、声は華やかだった。

「折角よるの夜を、こんな話をしてしまって——お雛ひなさまがおむずかりになるわ。」
用はもう済んだのだ、彼女は立って広間へ案内した。

広い客間の日本室を、雛段ななかばは半分ほども占領している。室の幅一ぱいの雛段ひなだんの緋毛氈ひもうせんの上に、ところせく、雛人形と調度類が飾られてあった。

「御覧あそばせ。まるで養子のように、誰も彼も、これは僕のだこれは私のだと、場所を占領して飾りますの、みんな一揃そろいずつですもの。いまに、室いっぱいになってしまいま

すのでしようよ。あんまり見ごとだって、それをまたいろいろの方が御見物にいらつしやるので——明日は^{あした}大勢さんをお招き申しましたわ。こんやは、あなたのためにだけよ。」

お雛さまの前に食卓がつくられてあつて、みんな席へついた。

「あたくしねえ、給仕^{きゆうじ}は、年の若い、ちいさい綺麗な男の子がすぎです。汚ない、不骨^{ぶこつ}な大きな手が、お皿と一緒につきだされると、まずくなる。」

ほんとに、その通りの少年が、おなじ緑の服を着て、白い帽子を頭において三、四人出て来た。

キュラソウの高脚杯^{グラス}を唇にあてて、彼女はにこやかに談笑する。

「今晚は、お雛さまも御洋食ですの。わざと、洋食にいたしましたのよ、自慢の料理人のございます。軽井沢^{かるいざわ}へゆきますのに連れてゆくために、特別に雇つてある人ですの。」

その、御自慢の料理人が、腕を見せたお皿が運びだされた。

「明日は^{あした}泉鏡花さんも見えるでしょうよ、あの方の厭^{いや}がりそうなものを、だまつて食べさせてしまうの、とてもおかしゆうござんすわ。」

泥鼈^{すっぽん}ぎらいな鏡花氏に、泥鼈の料理を食べさせた話に、誰も彼も罪なく笑わせられた。

あたしは、鏡花さんが水がきらいで私の住んでいた佃^{つくだじま}島^{うぢ}の家が、海瀟^{つなみ}に襲われたと

き、ほどたつてからとても渡舟わたしはいけないからと、やつとあの長い相生橋あいおいばしを渡つて来てくださつたことを思出したり、厭きらいとなつたら、どんな猛暑にも雷が鳴り出すと蚊帳かやのなかでふとんをかぶつていられるので、ある時、奈良へ行った便次ついでに、唐招菩提寺とうしやうぼだいじの雷除よけをもつていつてあげたことを、思出したりしていた。泉さんは、厭きらいといえば、しんから底から厭かたいな方かただつたのだ。鏡花愛読者が鏡花会をつくつて作者に声援しんごしていたころだつた。欣々女史も鏡花会にはいつて、仲間入りの記念しるしにと、帯地おびじとおなじに襪おらせた裂地きれじでネクタイを造られた贈りものがあつたのを、幹事の一人が嬉しがつて、

「此品これ、欣々女史の帯とおなじ裂きれだそうです。」

とネクタイをひっぱつて見せたのを、微笑ほほえましくこれも思出していた。

すると彼女はこういつていた。

「ええ、ええ、たいへんでしたわ。おいしいおいしいって食たべてしまつてから、たねを明あかすと、嗽うがいをなさるやらなにやら——」

介添かいぞええに出ている、年増としまの気のきいた女中が、その時の様子を思い浮うべさせるように、たまらなくおかしそうにふうツといつて、袂たもとで口をおさえた。

食後はもうひとつの広間へ移つた。そこはばかに広かつた。琴が、生田流いくたのも山田流の

も、幾面も緋毛氈ひもうせんの上にならべてあつた。三味線しゃみせんも出ている。

「こちらに、近衛家このえけからか出た大層お古い、名箏めいそうがあるようにうかがつておりましたが

――

と、はじめて浜子が声を出した。

「ああ、あれ御承知？　すぐ出させましょう。」

パチパチと手を打つた。女中たちが顔を出した。浜子はちいさな声で、

「その箏ことでなんか弾ひいて見ましようか、真つ黒になつて、鯉節かつぶしみたいな古い箏だけ
ど、それは結構な音ねを出すの。」

虫の好いい話で、浜子は他人ひとさまの名器めいきでよき曲を、わたしの耳に残してくれようとい
うのだ。わたしも横道おうどうにも、

「やつてよ、箏爪ことづめはなくなつて好いい。」

「いえ、それはあるにはある。」

浜子は、何処どこからか、たしなみの箏爪の袋を出した。なるほど鯉節のように黒く幅のや
や細い箏そうの琴が持ち出されると、膝に乗せて愛撫あいぶした。毛氈の上では華やかに、もうはじ
まりでした。お對手あいての弾手ひきてや三味線の方ひとの女も現れて来て、琴の会にぎわのような賑にぎわしいことに

なっている。

鼓つづみの箱も運び出されて来た。鼓うたいと謡うたいは堂いに入いっているとわかれていいる彼女ひとだった。

「おやおや、この分では、仕舞しまいまで拝見しするのかもしれない。」

浜子は、むずとして、軽く古い箏ことの絃いとに指いを触いれながら、そんなしやれを言いった。

二

その名めい箏そうも、あの大正十二年の大震災かいじんに灰かい燼じんになつてしまつた。そればかりではな
いあの黒い門いもなにもかも、一い切き合あ切き燃もえてしまつたのだ。軽井沢くつかげの別荘くつかげから沓く掛かけ
の別荘くつかげまで夏草あがを馬あの足あ搔かきにあふみしかせ、山の初秋さつそうの風さつそうに吹かかれて、彼女むらが颯さつ爽そうと鞭むち
をふつていたとき、みな灰あになつてしまつた。

「衷ちゆうが、あなたならお目めにかかるといいうから、私の部屋へやに寄よつてよ。」

と、あの時とき、大囲炉おおいろり裡らに、大茶釜おおちやがまをかけた前まへに待まちつていたむつむつしたよような重おもい口くちの
博士はくしは諧かいぎやく諺げんご家かだつたが、その人も震災かいじん後の十四年じゅうしゅうねんに亡なくなられた。

時代じだいははつきりと変かつてしまつた。欣々女史きんきんにょしの栄華えいががなくなつてしまつたからとて、彼かれ

女の才能は決してにせものではない。だが、激しい世相の転回があった。世界的な思潮の動揺にも押しゆきぶられていた。

せわしさに、昨日きのうの人を思出していられないというふうな、世の中の目まぐるしさだった。

ある日、浜子が来て、

「そこまで、江木えぎさんが来たのだけれど、急がしいといけないから、また来ますつて。」

「あら、帰ったの。」

あたしは惜おしがった、それはいつぞや、帰りぎわに、淡路町の邸やしきで、静な室を二室抜いて、彼女の篆刻てんこくが飾つてあつたのを見せられた時、どれか上げたいといったのを、またの時にと急いで帰つたばかりに彼女の篆刻は、あすこに並べてあつただけは、一個ひとつも残らず焼失したことの惜おしさを、なぐさめてあげたい思いで一ぱいだったからであつた。

欣々女史の書画——篆刻の技わざは、素人しろうとのいきをぬけて、斯道しどうの人にも認められていたのだ。

丁度、私は牛込左内町うしごめさないちようの坂の上うへにいて、『女人芸術にょにんげいじゆつ』という雑誌ざっしのことをしている時だった。二階の裏窓から眺めると、谷であつた低地ひくちを越して向うの高台たかみの角の邸やしきに、

彼女は越して来ていた。浜子もあまり遠くないところに移って来ていた。

「もう直に、練馬の、豊島園の裏へつくった家へ越すので『女人芸術』のと、あなたの判をこしらえてあげたいって。」

そういつた浜子は、何処かさびしげだった。自分も、横浜のとても好い住居も若い時から造らせた好い箒も、なにかも震災の難にあつて、命だけたすかった、身に覚えのある痛手なので、

「江木さんもさびしいでしょうよ。」

と、たった一人の孤独なので、此処まで来るにも、手提げを二ツ、鍵やら銀行の帳面やら入れてさげてこれは大切だといったと語った。あの女性が——と、聴くものも、いうものも、ただ顔を見合つた。また、その次だった。もうその時分には、練馬の新築に越していたのだが、

「江木さんところから今朝、真新しい萌黄から草の大風呂敷包がとどいたから、何かこんなに重いのかと思つたらば、土のついた薩摩芋で。」

と、浜子はおかしがりながら、何か気にかかるふうでもあつた。

それから間もなく、彼女は自殺したのだ。昭和五年の二月二十日、京都の宿で、紋服を

着て紫ちりめんの定紋じょうもんのついた風呂敷で顔を被おほつて、二階の梁はりに首を吊つつていた。

彼女は、愛媛えひめ県令せき関氏のおとしだねで、十六歳の女中の子に生れた。明治十年の出生であつたが、もの心づいた時は、京橋区木挽町こびきちよう、現今の歌舞伎座の裏にあたるころの、小さな古道具屋が養家だつた。後に、養母やしないおやは、江木家へ引きとられていたが、養家では、生みの男の子には銚かざり職しよくぐらいしか覚えさせなかつたが、勝気な栄子えいこには諸芸を習わせた。

新橋に半玉おしやくに出たが、美貌びぼうと才能は、じきに目について、九州の分限者ぶんげんしやに根引きされその人に死別しにれて下谷講武所したやこうぶしよからまた芸妓げいしやとなつて出たのが縁で、江木衷博士夫人となつたのだ。関家が東京に住み、令嬢のませ子さんが第一女学校に通学していた十五の時、江木衷氏の夫人はあなたの姉さんだといつてると知らせてくれた友達があつて、それが逢うきつかけとなつた。けれど、もう父の関氏はこの世の人ではなかつた。

今年の二月二十日、わたしはふと、ませ子さんに欣々さんの死ぬ前の様子がききたくなつた。二、三日たつて、相州片瀬そうしゅうかたせの閑居に、ませ子さんの室へやにわたしは坐つた。

ませ子さんも、清方画伯きよかたが「築地河岸の女」として、いつか帝展へ出品した美しい人である。病後とはいえ、ふと打ちむかつた時、欣々さんにこうも似ていたかと思うほど、

眼と眉がことに美しく、髪が重げだった。この女が、大学出の子息が二人もあって、一人は出征もしていられるときくと、嘘のような気のあるほど、古代紫の半襟と、やや赤みの底にある唐繻子の帯と、おなじ紫系統の紺ほいお召の羽織がいかにも落ちついた年頃の麗々しさだった。

「姉は惜い人でしたわ、育てかたと、教育のしようでは河原操さんのようなお仕事を、したら出来る人だったと思います。

死ぬのなら、もつと早く死なせたかった。あの通りの華美な気象ですもの。あの人の若いころって、随分異性をひきつけていました。私をはじめ淡路町へいったころは、毎晩宴会のようでした。あつちにもこつちにも客あしらいがしてあって——江木の権力と自分の美貌からだと思つていたから。だから顔が汚なくなるということが一番怖い、それと権力も金力も失いたくない。それが、震災で財産を失したのと喪に死なれたのと年をとつて来たのが一緒になつて、誰も訪ねて来なくなつたのが堪らなかつたらしいのです。よく私に、夫に死なれて後誰も来なくなつたかと聞きました。お姉さまの周囲の人と、私の方の人とは違うから、私の方は今まで通りですという、変に考え込んでしまつて——財産がすくなくなつたつていつでも他のものなら結構立派に暮してゆけるだけはあつたのです

し、今思えば、京都の方へ旅行するから一緒に来てくれないかといいました。そんなこと言ったことのない人でしたが、よつほどさびしくなったのだと見えて、練馬ねりまの宅うちには離れも二ツあるから、一緒に住まないかとも言いしました。二男を子にくれないかともいいました。けれどあんな気象の人ですからどこまで本気なのかわからないので誰も本気で聞かなかったのです、あとでは強い人があれだけいったのには、いうに言えないさびしさがあつたとは思いましたけれど――

そうそう、よく死ぬのは何が一番苦しくないだろう。縊くびくり死しが楽だというけれどというので、いやですわ、涙はなを出すのがあるといえますもの、水へはいるのが形骸かたちを残さないで一番好いと思うと言いますと、そうかしら、薬を服のむのは苦しいそうだね。と溜息ためいきをついたりして、変だと思った事もあつたのですが、大阪へいっても死ぬ日に、たつた一人で住すみ吉よしへお参詣まいりに行くといつて、それを止めとたり、お供ともがついていたりしたら大変機嫌げんがわるかつたのですつて、それから帰つて死んだのですが、あとで聞くと、住吉は海が近いのですつてねえ。」

わたしは静しずにきいていた。故衷ちゆう博士たかしがこの姉妹へいらいふたりを並べて、ませ子は部屋へやで見る女、栄子は舞台ぶたいで見る女といったというが、わたしは、老年らうねんの衷氏ちゆうしの前まへにいる欣々きんきん女史にょしは孫まご、

もしくは娘のような態度で無邪氣そうに甘えていたことを言つて見た。

ませ子さん言う。

「姉は利口でしたものね、氣むずかしい方に、実によく勤めていました。」

衷氏が歿なくなつた時のお通夜や、仏事の日などは、ありとある部屋に、幾組といつてよいかわからぬほどのお客をして接待した欣々女史、その新にい盆ぼんには、おびただしい数の盆ぼ燈籠とうろうを諸方から手た向むけられたのを家中の軒さきから廊下から室へや内のなかの天井へずつとかけつらねさせたという、豪華なことのすきな彼女が、練馬の新築の家では、夜になるとピン、キシキシと、木材のひわれる音に神経を悩まして、いやだというように弱くなつてしまつたとは、美貌の誇りと、栄華の夢のさめぎわの、どんなにさびしいものかという底に、それよりほかの根はなんにもないであろうか？ あたしは否いといえいたい。

それは派手な氣質もあつたであろうが、あれだけの珍しい才能の人に賑にぎやかしにばかり反それていつた一面も見なければならぬ。あたしははじめてあつたあの宵節句よいせつくの晩の感想を、こんなふう書きつけてある。

——まだ春寒い夜更よふけの風に吹かれて門を出ながら、しみじみと、この華やかな人の心のかげに潜む、どうしても払うことの出来ない、人世の果敢はかなさというものについて考えさ

せられた。

そしてまた想^{おも}って見た。真の幸福をつかむものには寂しさがあるのかと――。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「婦人公論」

1938（昭和13）年4月

初出：「婦人公論」

1938（昭和13）年4月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

江木欣々女史

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>